

て、そのうつろに夏菜莢の實がぎつしり詰め込んであったのです」に注目し、見つめる目を持った愛の不能者の問題と、えぐられた目に詰め込まれていた夏菜莢が提示すること、以上二点について考察を行う。そしてそこから導かれる意識と行為の絶対的な溝の問題を言及していく。

寺山修司歌集『田園に死す』にみる眼球のイメージ

博士前期課程 二年 児玉 喜恵子

寺山修司の第三歌集『田園に死す』の跋には、「これは、私の『記録』である」との既述がある。そして、寺山はこの歌集を「私の質問の書」という。

今発表においては、『田園に死す』における眼球のイメージについての考察を通して、作品から発せられている質問の意味を説明し、寺山の表現世界の特徴と独自性の究明の一助とした。

具体的方法として、各歌について眼球のイメージがどのようなあらわれているかを読みとり、同名の寺山の映画作品及び実験映画『眼球譚』を視野に入れながら論じてゆく。

《中国学》

『孟子』の「生」と「性」について

博士後期課程 一年 石原 伸一

性善説を主張する孟子と無善無悪説を力説する告子との論争が、

『孟子』告子篇上に生き生きと描かれているが、告子の思想というのは、結局第三章にある「生之謂性」という言葉に集約できると考えられる。（告子論性数章皆本乎生之謂性之一言——『孟子或問』——）私は今、この言葉が後代の思想家たちにどのように解釈され、またどのように自己の思想表現に使われてきたかということを調べている。

北宋の程頤は、この告子の言葉をそのまま引きながら、「性即気、氣即性」という解釈を加え、独自の性論を打ち立てる。程頤は、『論語』の「性相近、習相遠」への解釈手法、つまり性の本と所稟の性とを分ける手法をこの解釈にも使っている。朱熹は、その理気鋭の立場から、性Ⅱ理、生Ⅱ氣と区別し、さらに告子の言う「生」に「人物之所以知覺運動者」という定義を与えている。

この朱熹の解釈が朱子学者の定説になって行くが、明代になると新鋭が現れる。その代表的な解釈は、王守仁の「良知」を絡めた心学的解釈である。今回の発表では、宋代・明代の主立った解釈を紹介し、人性論の流れの一端を考察してみたい。

『子不語』の遊戯性について

博士後期課程 一年 伴 俊典

袁枚（一七一一—一七九七）は、清朝乾隆期に「性靈説」を以て沈徳潜らの格調派に対抗した南方詩壇の雄である。

だがまた一方、彼は蒲松齡の『聊斎志異』の後に志怪小説集『子不語』（『新齊諧』）を刊行するなど、小説家としても活躍し、いわゆ

る正統——非正統の枠組みを超えた自由人でもある。

『子不語』は、『聊齋志異』、『閱微草堂筆記』と共に清朝志怪小説を代表する作品であるが、従来、それは志怪小説本来の体裁にそぐわないと批判されてきた。しかし、彼の小説に対する見解を見る限り、その点こそが実は彼の小説創作の中心的意図、つまり遊戯性の重視であるということが分かる。

本発表は、『子不語』の中から、『隨園瑣記』、『孝女』などの諸篇を選んで、袁枚の目指した遊戯性について考察してみようとするものである。

魯迅「風箏」末尾の解釈について

博士後期課程 二年 牧 聡 士

「風箏」は、魯迅の散文詩集『野草』の第九編に位置する作品である。

その内容は、「幼い弟が一心に作っていた凧を兄が見つけ、激怒のあまり、弟の目の前でこれを打ち壊した。二十年後、兄はその過ちを気づき、弟に許しを乞うが、当の弟は何も覚えていなかった」というあらすじである。

ところで、この作品の末尾の「我倒不如躲到肅殺嚴冬中去罷——但是、四面又明明是嚴冬、正給我非常的寒威和冷氣」という句については、未だ確定的な解釈が与えられていない。本発表では、中国及び日本における研究業績をふまえた上で、些か私見を述べてみたい。